
ボクの憂鬱、真白の密かな秘め事

角野のろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクの憂鬱、真白の密かな秘め事

【Nコード】

N8836W

【作者名】

角野のろ

【あらすじ】

ボクが出会った真っ白な彼女。彼女には特別な秘密があった。

プロローグ（前書き）

大学三年頃に書いたお話だったと思います。本作に登場する「ゴンさん」と別製作の「権左衛門さん」とはなんの関係性もありますん。

プロローグ

この世界において、自身の存在がエラーでないなんて誰が保障できるといふだろうか。

誰かに必要とされる人間になりたいと願ったところで、それは自分自身が誰かを必要としなければ生きていけないということ……。ボクには自信がなかった。

だから、目の前にいた少女に夢みtainな理想を抱いてしまったのかも知れない。

誰かを傷つけることも誰かに傷つけられることも無い至高の存在。夜闇の下、月光を背にして目の前にいる少女は、あまりにも純粹無垢で穢れを知らないように見えた。質の良い絹糸を一本一本集めたようにストレートに伸びた髪、色白の肌、大きすぎず小さすぎもしない、西洋の骨董人形のような目、耳、鼻、口といったそれぞれのパーツ。ちよつと力をいれただけで折れてしまいそうな腕とその先に伸びる細く長い五指。きつと足も同じようだと思う。身に纏った服はゴシッククロリタというのだろうか。そんなフリルに似た衣装の胸元には銀色のブローチが付いていた。そして、彼女の持つほとんどの部分がすぐ溶けてしまいそうに儚げな雪のような白だった。そう、彼女の色を一言で表すなら白だっただろう。

彼女から表情は読み取れない。隔絶ということではない。たとえば、身の回りでどんなことが起ころうとこの世界と自らはまったく関係の無いことと割り切っている、そんな無の表情だった。

少女の心は純粹な光なのか、それとも闇なのか。いや、そもそもそんな定義すら必要とはしないのか。

「……君は……?」

「私……? 私はい——」

形の良い口を動かして、彼女は感情の籠もらない声でそう名乗った。



ボクは普通の高校に通う、これといって何もとりえの無い普通の学生だった。成績は良くも悪くもなく平均の辺りを保って彷徨っている。自分のことで唯一思いつく特徴といったら、周りより少しだけ背が小さい。ただ、それだけ。学校で問題を起こしたこともなかったし、先生に呼び出されたりすることもなかった。ただ来年からはそうも言っていないだろう。受験して大学に進学するか、就職するか。決めなくてはいけないのだから。ボクが将来のことを決められないように、他の人も同じように悩んでいる、そう思っていたかった。かといって、そのことを友人に相談しようとは思わなかった。所詮、幾ら相談したところで、人は自分のことで手一杯で他人のことまで考えられないのだから。そんなことするのはよっぽどのお人好しか、世間知らずだけでいい。そうやってボクは意味もなく日々を過ごしていた。

気がつけば夏は終わり、緑葉は落葉となって枯れて散る、そんな季節になろうとしていた。友達と遊んで、勉強をして、それでも生まれる暇を持て余す、そんな単調な日々。それがいつまでも続くと思っていた。

ボクはいつものように一人、学校の帰り道を歩いていた。すると突然、目の前の視界を奪われた。気配を感じなかったのはおかしいと思った。が、それでもこんなことしてくるのは誰か友達の悪ふざけだと思って、おどけてもがいた。

「やめろよく、誰？ 誰なの？ 池？ それとも拓馬？」

思いつくだけの友達の名前を挙げてみる。ごつい手の感じからして、男なのは間違いがなかった。けれど、幾ら呼び掛けてみても返答はなかった。

「ねえってば」

「黙れ」

野太い声で一氣に現実に引き戻される。知ってる友達の声じゃない。けれど、それじゃ一体誰なんだろう……？ 視界を塞いでいた手が口の方まで伸びてきた所で、本格的に危機感を覚えた。おどけているのではない、本気で逃げようとしてもがく。けれど、男の力にあらがうには小柄なボクの力ではどうもできなかった。だんだんに薄れゆく意識、たった今のこの瞬間は現実感をまったく持っていなかった。



気がつくと、ボクは薄暗い工場のようなところに鎖で縛られていた。意識が覚醒してすぐだからだろう、頭がズキンとした。動けるかどうか体をよじらせてみる。が、鎖がますます食い込んできて痛いだけだった。

「目が覚めたか」

「ひっ」

男の声を聞いて、生理的にビクリと震えた。その声はボクの目と口を塞いできた奴の声だったから。ひょろりと痩せて背が高いスーツを着た男だった。

「ボ、ボクを一体どうする気……なの？」

「はっ、どうするかだど？ 決まってる、お前はこれから売り物になるんだよ」

「売り……物！？」

男の冷酷な言葉を聞いてボクは一瞬、耳を疑った。売り物にする、それは言葉そのままの意味なんだろうか。人身売買、言葉だけなら聞いたことがあるし、意味も分かる。けれど、それが自分の身に降りかかるなんて、想像もつかないし現実感が湧かなかった。

「お前みたいな小柄な奴はお偉いさん方ん中では、比較的需要があるんだ。きつと、高く買ってくれるだろうぜ、それにだ。悪いようにはされねえさ。お前が従順でさえいればな」

そういうと、男はクククと息が詰まったかのような笑い方をした。聞いていて吐き気がするような笑い声だった。



男に捕らわれてから数日が経った。今頃、家族はボクのことを心配してくれているだろうか、もし心配してくれているとしたら嬉しい。けれど、そんな風に心配させてしまう自分が嫌だった。何でこんなことになってしまったんだろう。誰も話し相手になってくれないことが心細かった。ボクは不安だったせいか、唯一話せる男に話しかけた。あんまりにも話しかけるものだから、うんざりしたようで、途中から猿轡を噛まされることになった。

受け渡すまでの間に、餓死とかで死なれたら困るからだろう。食事の時は外してもらえたけど……。

「お前の買い手が、もう少しで見つかりそうだぜ」

しばらく留守にしていた男は戻ると、引きつったような声で笑いながら言った。

「予定通りに行けば、俺はお前を売って大金を稼げるんだ。オークションってやつだ。お前の価値を認めてくれる奴が一番高い金を出してくれる。お前は知らない人間じゃないと認められるってわけだ。俺には金が入るし、お前は存在を認められる。どうよ、ギブアンドテイクだろ？」

言いかえそうとしたが、何も言えなかった。猿轡をしていたという理由もある。けれど、自分の存在を認めてくれる、そんな響きに惹かれていることに気付いたのだ。

男はまた笑うと、ボクに巻かれた鎖を多少緩めた。傷がつかないように少しでも高く売るためだろう。涙ぐましい努力だった。そうしてから、男はまたどこかに出かけていった。

ボクはまた一人になった。緩んだ鎖のお陰で多少身動きは取れるようになったけど、抜け出せそうなほどの隙間はなかった。がんじがらめよりはましだったけど、抜け出せそうで抜け出せないのは蛇の生殺しみみたいだった。

「ねえ。貴方は逃げ出したい？」

諦めの意思が浮かんだ時、どこからともなく声が聞こえた。ボクでも、ボクをさらった男でもない第三者の声。もしかしたら、助かるかも知れない。思い切り声をあげた。

「んぐぐぐむむぐうう~~~~~！」

……そうだ、猿轡のせいで喋れなかったんだ。うっかりとはいえ、恥ずかしい。一人でうろたえている内に、声の主は目の前に現れてくれた。綺麗……。素直にそう思った。そこにいたのは白い少女だった。

肌が色白なだけじゃない。髪の毛やフリルのついた服、胸元の銀のブローチ以外は白だった。

彼女はボクの猿轡を手際良く、外してくれた。

一歩歩くごとにスカートがふわりと広がるように揺れる。まるで、天使が羽を広げたかのようなだった。

「もしかして貴方は天使なの？」

「てん……し？」

訊ねたのは自分なのに、何故か聞き返されてしまった。

「あ、いや、えっと……君は……？」

「私……？ 私^{しんしろ}は真白」

少女は感情の籠らない声で、ただボソリと呟いた。

「来て、貴方を匿ってあげる」

ボクは何も分からないまま、真白と名乗る少女についていくことにした。



怪しげなネオンの光が路地裏を包み込んでいた。ついさっきまで閉じ込められていたのだ。今は人工的な明かりでも、あった方が人の存在を感じられて安心できた。ボクのことをさらった男はもう、戻ってきただろうか。いなくなったボクのことを探しているかもしれない。また捕まったら、どんな目に遭うかも判らない。あの場所には戻りたくないと感じていた。

ネオン街に着くまでも、ボクは真白にこれからどこに行くのか、どうしてあんまり喋らないのかとか、何度も話しかけた。けれど、真白はただ「着いてきて」と無感情なトーンで言うだけだった。

「あゝら、真白。お帰りなさあゝい」

とある店の扉の前に立ち止まって、真白は最初に一回、次に3秒ほど間を開けて三回、また3秒開けて、最後に二回ノックした。すると、しばらくして野太く素っ頓狂な声が扉を開く音と共に響いた。随分派手な化粧だ。ひよろひよろとしていて、背の高い金髪の女だった。

「あらあら、だいぶ小さなお客様ねえ。こんにちは、あたしがこの店のナンバー1を務めるゴルゴンゾーラよん、ゴンちゃんって呼んでねえん」

ボクはその女の人がさっきの野太い声を出していたのだと分かって、かなりの衝撃を受けた。オカマって言えばいいのかな。よくよく見れば、顎の辺りにうっすらと髭が生えているのが見えた。どうやら、オカマバーといった様子のお店らしい。

「あ、う、えっと……ゴン、さん……」

「ふうん、小さいけど顔の造りは悪くないんじゃないか……ねえ、貴方どう？ あたしの店で働いてみない？」

ゴージャスな金髪を揺ら揺らさせながら、ヌツと顔を近づけるゴルゴンゾーラさん、もといゴンさんは唐突にそんなことを言ってきた。

た。

「ねえ、ゴン。中に入っても良いかしら」

「ええ、もちろんオーケーよおん、さあさあ、貴方も中にあがって」

真白の無愛想な言葉を気にした様子もなく、ゴンさんはボクたちを店の中へと招き入れた。



「ゴン、調べてくれた？」

「ええ、もちろんよ。アンタが今追ってるのは結構大きい組織みたいね。だからすぐに情報が見つかったわ。同じ系列の職業からはブラックリスト扱いを受けているみたい」

「そう……」

「でも、アンタの場合はやらないわけには行かないんだものね。そうも言ってられないか……」

右手の親指と人差し指で、顎の髭をジョリジョリと撫でてからゴンさんは腕組みをして、考え込む仕草をする。

「……」

大きな横長のソファに座らされてから、しばらく。真白とゴンはボクがいらないかのように二人の会話を進めていた。そこにボクの入る余地はなく、何を話しているのかもよく分からなかった。ただなんとなく物騒な話をしている、ということだけは分かった。

「あの……」

おずおずと話しかけて、ようやく二人がボクをないがしろにしていたことに気付いて、声を掛けてきた。

「ごめんなさいね、うっかりしちゃってたわ。それで、貴方はこれからどうするの？」

「どうするって言っても……どうしたらいいのか……」

家に帰れば、きっと心配してくれている家族を安心させてあげることが出来るだろう。けれど、それだけでいいのか。こんな事件に関わってしまったボクは何も知らずにいることはできなかった。

「もし、貴方が協力してくれるのなら、スムーズにことは運ぶと思うわ」

真白は淡々とした口調で言う。

「えっと、ボクは……怖い、けれど、何も知らないでいるのは嫌です。だから……協力します」

具体的にどのように協力すれば良いのかは分からなかった。けれど、このままにしていたら自分と同じような被害に遭う人はいるだろう。それを何でもないことのように見過ごすことは今のボクには出来なかった。

真白がボクにさせようとしたことは潜入捜査だった。囹捜査と言っても良い。ゴンさんが売人の役を受け持ち、ボクを売り物として組織に近づき油断させる。そして、取り引きが始まったところで、真白が現れるという作戦だった。ボクは真白が囹の売り物になっていいのではないか、とゴンさんに問い掛けた。すると、ゴンさんは、

「真白が縛られちゃってると意味が無いのよねえ、これが」

何やら意味深な言葉を呟いた。しかも、縛る道具は鎖なのよ、と続ける。

ボクは捕まってる間、鎖に縛られていたので平気です、と答えた。そういえば、ボクをさらった男はどうなったんだろう。売り物がいなくなってしまうって、平気だったのか。どうにかされていなければ、また再会する可能性もあるかもしれない。

そして、取り引きの日、当日となった。



黒いスーツ姿に身を包んだゴンさんは、取り引きの会場に着くまでに安心しなさいね、怖がらなくて良いのよ、と励ますように声を掛けてくれた。

けれど、実際はそんなゴンさんも余裕無く緊張しているように見えた。

ただその中で真白だけがいつもと変わらぬ平常心だった。

途中で彼女を降ろすと、ボクたちはそのまま会場へ向かった。別れる直前に彼女はボクの唇に口付けをした。いきなりの展開にどぎまぎしてしまったけれど、その瞬間、どこか真白の纏う雰囲気が変わった気がした。

会場は端から見れば貴族の抱える立派な豪邸のようだった。実際にそうなのかもしれない。この場所で人身売買が行われている……。金を持った大人の汚い部分を見た気がして、ほんの少し吐き気がした。受付でやり取りを済ませると番号札を首にかけられて奥の方に進まされる。二十八番という数字だった。そこにはボクと同じようにさらわれた子達の姿があった。そのほとんどがまだ年端もいかないうような少女だったのが痛々しかった。ボクは身近にいた売り物の少女に大丈夫だよ、と声を掛けた。けれど、少女はうつろな瞳のまま、ボクを見ただけで返事がなかった。その時、喉にみみずが這ったような傷跡を見つける。少女は声帯を切られていたのだ。自分ももしかしたら、あの男に同じようなことをされていたかもしれない。と思ってゾツとした。幸い男の姿はなく、見つかるような心配はなかった。

番号札はその売られる数字の順番というわけではなく、くじで決まるランダムなようだった。

「二十八番、前へ」

不安なボクの様子が分かったようでゴンさんが励ますように肩を

ポンと叩いた。一人じゃないと感じて、嬉しくて少しだけ安心した。道を進んでいくと、目の前に大きな扉が現れてきた。おそろおそろその扉を押す。急激な光が目を刺した。

シャンデリアの付いた天蓋、ホールのステージのような場所、そこにいたのは一見すれば、清潔な紳士淑女の団体のようだった。しかし、その実態は想像するのもおぞましい倒錯した世界の住人なのだろう。穏やかな微笑の中で、その眼だけがじろじろと品定めをしているのが感じられた。

「ふむ、これはこれは……」

「なるほど、なかなかですな」

「ええ、可愛がる甲斐がありそうですね」

紳士淑女の手が近づいてくる。もうすぐ触れそうなくらいに近づいてきたところで、その手が払われた。

「一体、何をするッ！」

「失礼、売り物に手を出していただけるのは購入者のみの権限となっておりますので」

そう言ったのは、ゴンさんだった。手を伸ばしてきた白髭の紳士は渋々といった様子で、その手を下げた。

「さて、お目にかけますこちらの商品。見目麗しき白磁の肌、美貌を讃えたその肉体は穢れなき処女でありますッ」

朗々とした声で、ゴンさんがボクのことを宣伝する。そんなに大それたことなのか分からないけど、おおっと、どよめく声がそれに続いた。

「それでは最初の売値は一万からになります、さあお買い求めのお客様はお手を挙げて下さいッ！」

「二万！」

「三万！」

「五万出そうッ！」

「私は十万を出すわッ！」

手を挙げて、醜いお金の競り合いが始まる。どんどん釣り上がっ

ていく額に驚く。ゴンさんの言葉では処女ということにも何故か価値があるようだった。そして、ここでは自分が必要とされる存在なんだ、と感じた。

「人の価値なんて、お金じゃ決められないわ」

その時、凜とした冷たい声が場内に響いた。思わず、皆は口をつぐむ。次の瞬間、天蓋のシャンデリアが割られ、閉ざされた世界は闇に包まれた。

「キャアッ！」

「何だ、一体何が起こったんだ!？」

シャンデリアの代わりに用意された非常灯が点き、ようやく何が起こったのか分かった。ボクと買い手を隔てたその中間に一人の少女の姿があった。

「貴様、何者だ？」

「私？ 私は真白^{ましろ}よ」

天使にも似た容姿の白の少女は自らのことを名乗る。出会った時と変わらない、その美しく可憐な姿。しかし、唯一異なる点はその両手に携えた銃だった。右手にハンドガン M19、左手にサブマシンガンのイングラムをそれぞれ構えている。

「まずいッ！ 銃を持ってるぞ」

逃げ出す者が大半だったが、幾人かは護衛の人間に銃を構えさせた。真白はあまりにも無防備だった。单身にも関わらず、まったく防御する素振りを見せなかった。その隙にボクはあらかじめ緩く締められていた鎖を振りほどき、ゴンさんを追って、柱の陰に隠れた。ゴンさんは後ろ手に縛っていたゴージャスな金髪をほどいて、髪の毛を振る。そして、スーツの中に隠し持っていたハンドガンのグリップを握った。

偶然、同じ場所に隠れた紳士風の姿をした男は、

「アンタ、何者なんだッ？」

と、カチカチなる歯の音の合間に震える声で訊ねた。

「私？ 私はオカマバーのマスター、ゴルゴンゾーラよっ、ゴンさ

んとお呼びッ！」

ゴンさんは銃を頬の近くに寄せるとにんまりと笑んだ。



初めに撃ったのは護衛の一人だった。

真白は後方に跳んで避けつつ、お返し銃弾を右手から放つ。弾は護衛の急所、眉間に見事に命中していた。堰を切ったかのような銃弾の奔流。それが真白の華奢な肉体に穴を穿とうと追っていく。銃撃のほとんどもを避けて、真白はその返答である弾丸をことごとく急所に撃ち込んでいた。弾が無くなると内刀を抜き、その残党を一撃の下に切断した。その断面から霧散する血液が噴水のように周囲に広がる。凄惨な光景だった。

「この世界は誰も傷つけずに生きていける世界じゃない」

ついに、そこにボクとゴンさん、反撃してこなかった人たち。それ以外には人と呼べるものが誰も居なくなると、真白は悲しげな表情を浮かべ、胸に手を当てる。鎮魂の詞を紡いだ。その瞬間、彼女の体が不自然に揺れる。その胸には真紅の染みが浮かんだ。

「へへ、殺ったか……」

「残念ね。私の人格は痛みを感じないの」

次の瞬間、男は一刀両断された。噴水のような血しぶきが舞って真白の白い顔に飛び散った。雪原に紅い薔薇の花びらが落ちたようだった。よく見れば、その男はボクをさらった男に見えた。彼女は何かを掴み取ろうとするかのように頭上に手をかざす。青白い光が一瞬、その手に集ったかのように見えた。そして、全てが終わった。

エピローグ

「……どう、して、真白は撃たれても平気だったの……？」

ボクが尋ねるとゴンさんが答えてくれた。

「この子の中には二つの人格があるのよ。ひとつは感情が欠落した人格、そして、もうひとつは痛みを感じることが出来ない、五感のうち、触感の欠落した人格。今のこの子は後者よ。それは世界に飛び散ってしまった心のカケラのせい」

その時に知った。彼女の続けている不毛な戦いを。真白がしていること、それはバラバラになった自分の心のカケラを集めることだと。そう、本当なら彼女にも笑顔や哀しみ、そんな感情があったはずなんだ。だけど、今の彼女には何も無い。彼女は至高の存在なんかじゃない。元々、空っぽだったんだ。何も感じられない。それはどんなに悲しいことなんだろう。その時、彼女の瞳から一筋の雫が零れた。

何故だろう、ボクはその、ほんの一瞬だけ真白が笑ったように見えたのだ。

「幾つに散ってしまったのかは分かるの？」

「分からないわ。あまりにもバラバラにされてしまったもの」

そう言って、彼女はもう一度、ボクに口付けをした。その時、真白ましろがもう一つの人格である真白しんしろになったことが判った。どうやら、真白の口付けは二つの人格を変えるためのトリガーのようだった。

「それじゃ、お別れね。アンタも女の子なんだから、もっと気をつけなきゃ駄目よーん？」

ゴンさんはそう言って、ボクの頭を軽くデコピンで小突いた。そのそっけない優しさが嬉しかった。真白はこれから先も自身のバラバラになった心を取り戻す戦いを続けるのだろうか。

生きるという戦いの日々。
ボクはまた日常に戻っていく……。

エピローグ（後書き）

大学当時の悶々としていた時期に書いた物語なので、いろいろモヤモヤしていることがわかってしまう部分がそこかしこにちらほら見えますね。登場人物の一人「ボク」の性別は女の子ですが、ヒントがもう少しあったほうが良かったでしょう。何かを隠しながら書くのは難しいので要精進ですね。機会があれば、いつかゴルゴンゾーラさんと真白の出会いの話とかも書けたらいいな、などと考えております。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8836w/>

ボクの憂鬱、真白の密かな秘め事

2011年9月21日03時34分発行